

重松明久著

『蓮如と越前一向一揆』

このほど県立図書館・県郷土誌懇談会が刊行した県郷土新書第二集『蓮如と越前一向一揆』は、福井大学教授重松明久氏の著作によるものである。周知のとおり著者は、真宗史の研究については斯界の第一人者であるが、本書では本願寺第八世蓮如の動向を中心に、越前真宗史のハイライトともいうべき越前一向一揆の全体像を、政治・社会・宗教思想の各方面から、多面的な解明のメスを入れ、できるだけ興味深く平易に書き下ろしている。

## 三上 書評 蓮如と越前一向一揆

全体を四章に大別し、一「蓮如、吉崎へ進出」では、(1)大谷本願寺の受難(2)東山時代の蓮如(3)近江教団と蓮如に区分し、激動する政治社会情勢を背景にして、蓮如の幼少時代や修学・布教活動を描き出し、彼の独創的な布教方法としての「御文」の果す宗教的、社会的意義を明らかにする。

二「吉崎時代の蓮如」では、(1)蓮如、吉崎に来る(2)吉崎における布教(3)一向一揆と蓮如に三分するが、とくに読者の関心の的となる吉崎進出の理由については、歴史的展望に立った著者独自の鋭い見解をひれきする。そして吉崎における真剣な布教状況を述べ、また家族のなかでの蓮如の偽らぬ人間性をも浮き彫りにする。さらに一向一揆に対すを蓮如の態度や吉崎退出の事情などにつき、実証的な推論を下している。言うまでもなく、一向一揆に立ち上った門徒の武士・農民の側としては、世俗的な封建権力支配側の収奪を排除せんとする社会・経済的要因と、村落の道場を基盤とする信仰上の自由を確保せんとする宗教思想的要因の二面性もち、従来の斯界の研究

視角が、とかくいずれか一方に傾斜する向きがあるが、著者は双方の視座を十分ふまえて、多面的、総合的に一向一揆の解明に取り組んだことは、極めて高く評価されるべきであろう。

三「長享・弘治年間の加越一向一揆」では、(1)長享年間の一向一揆(2)永正・享禄年間の一向一揆(3)天文・弘治年間の一向一揆に区分し、四「天正年間の越前一向一揆」では、(1)元亀年間の本願寺教団の動向(2)天正年間の越前一向一揆(3)越前一向一揆の終末に三分して、一揆の地域的な足取りを、具体的かつ相互関連的に克明に描き出している。

本書につき、大谷大学教授北西弘氏は、「(前略)といった、一向一揆は、四面楚歌の門徒たちが、自己嫌悪に似た感情から、やむなくたちあがった灰色の行動であったのか、あるいは、可能性を追求するパラ色の行動であったのだろうか。政治経済的な状況と農民の意識は、宗教を介してどのような関わりにあったのだろうか。」と問題提起して、「大局的な見地から一向一

揆を見極めた本書によって、私の積年の課題を解くことができた(後略)。」との推奨文を寄せている。

確かに越前一向一揆を、学問的に通観した実証的な研究が、従来ほとんど皆無であっただけに、この分野の学徒はもろろん、一般の識者には、ぜひ精読に値する名著であると思考される。

〔新書版、二七六ページ、頒価八〇〇円、  
申込先、福井市宝永三丁目一―一六県立図書館内、福井県郷土誌懇談会〕